

「心が燃える時」

詩篇 第46篇 1節～3節
ルカによる福音書 第24章 13節～32節

説教 岡村 恒 牧師

夜が明けきらないうちに何人かの婦人たちが、主イエスが埋葬されている墓に急ぎました。もう1度丁寧に埋葬するためでありました。しかし、その墓は主を埋葬して別れる場所ではなくて、[主は生きておられる]、驚くべき事を聞く場所となりました。

その日の午後、ふたりの弟子が、エルサレムから10km程離れたエマオに向かって歩き始めます。この数日、そして朝の出来事を思い巡らせながら語り合っていました。主イエスが十字架の上で死なれたとき、大地は揺れ動いたのです。世界全体が深い悲しみと闇に覆われたような出来事を目の当たりにしました。しかしこのふたりは、復活の知らせを聞いても信じることはできません。人間の知恵で理解できる答えを求めながら、エルサレムを後にしました。

「語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。」(15節)主は、この朝復活されたばかりで他になさることはいっぱいあったのではないのでしょうか。しかし、この日主イエスがなさったことは、このふたりと一緒に歩くことでした。代々の教会は、主イエスを信じるようになる救いの道筋を、この出来事の中に発見し、慰められてきました。

信心深い弟子が、復活された主にお会いすることを祈り、待っていたら主イエスが来られた、というわけではありません。信じることができないうで、不安と恐れを抱いて、エルサレムに留まることをやめてエマオに下って行くようなふたりです。しかし、このふたりの傍らに主イエスが現れて共に歩き、語り合っ下さったのです。

このふたりと主イエスのやりとりは、私たちがどのように信仰に導かれて生きるようになるか、その道筋を明らかにしています。「イエスは彼らに言われた、『歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか』。」(17節)当惑をし、不思議に思いながら、ナザレの主イエスのことについてクレオパは語り始めます。すると主はすぐに、聖書全体に渡って解き明かしてくださいました。主の言葉を聞いているうちに、私たちの心が燃えるようになるということ、聖書は約束として語ります。聖霊が注がれ、主の愛に燃やされて、主と共に生きるようになるからです。これは洗礼を受けた者への特別なプレゼントです。このふたりは主イエスの話を聞

きながら燃やされました。そして、[主は生きておられる]この1言を語るために、彼らは走り出しました。心を燃やされた者は、もう、そこに留まってじっとしていることができなくなるのです。

これはあのエマオへの途上で1度きり起こった出来事ではありません。ヨーロッパの多くの教会では、この場面が描かれて掲げられています。ふたりの人と共に主イエスが歩いて行く、ただそのような絵です。しかし、その絵を見るだけで、この体験が繰り返り起こっていることを代々のキリスト者は確認してきました。この地上をさまよい歩くような旅、その只中に、主が共に歩き、語り始めてくださる。私はあなたのために祈り、十字架にかかり、命を与え尽くして死んだ。そしてよみがえり、あなたの救い主としてここにいる。そう語りかける主の言葉を、代々の教会は体験してきました。

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイによる福音書 28章20節)そう約束をされた主イエスは、ご自身の霊を信仰者の内に注ぎ入れ、共に歩いて下さいます。エマオの途上という場面は夕暮れの出来事です。悲しみが世界を覆い尽くすような夕暮れ。しかし、それは主イエスが再び来られ、目に見える世界が巻き去られ、新しい地と新しい天が到来する本当の朝が来るための夕暮れです。主イエスが私たちと共に歩んで下さり、信仰を与え、神の計画を見せてくださる時、私たちはこの夕暮れを、期待を持って過ごすことができます。

主よ、来てください。代々の教会がそう祈ってきたとき、いつでも朝の到来を待っていました。私たちも今、主イエスが再び来られる日を待ちながら、この地上で託された務めを果たします。主は私たちに憐れんで、共に歩き、信仰を与え、心を燃やし、用いて下さるお方です。おろかで、心が鈍く、目が遮られ、主を認めることができないうこの私が、主に出会っていただいたとき、目が開かれ、主の命によって燃やされる者に変えられるのです。礼拝ごとに、祈りのたびに、御言葉にふれるごとに、私たちは繰り返すこの体験を重ねながら、主のものとして歩み続けます。

(記 説教要約奉仕者)